

乾隆年間廣東貿易における外国産棉花の輸入をめぐる

松 浦 章

The Import of Cotton in Guangdong during the Qinglong Era

MATSUURA Akira

In China, silk has been known as the primary clothing material, but cotton also came to be known as a raw material for modern clothing since, approximately, the 10th century. Cotton gained fame across the Ming Dynasty, and during the Qing Dynasty, it began to be exported to Europa from Canton China. However, the importation of cotton from overseas to Guangzhou began during the Qinglong year. The importation was soon banned; however, cotton was still continuously imported from India to Guangzhou owing to the constant consumption established in the Guangzhou market. Therefore, this paper describes the details of the import ban on the cotton flower during the Qinglong era.

キーワード：清代 (Qing Dynasty)、中国 (China)、緬甸 (Mian-hua)、棉花 (Cotton)、
外洋脚船 (Country ship)

1 緒言

中国で棉花が栽培されるようになるのは10世紀ころと言われ、それ以前の中国の人々は、主にキヌとアサを主な衣料としていたと言われる¹⁾。木綿以前のことは不明なことが多い。

木綿が衣料として知られるようになるのは11世紀頃で、これは多年生のキワタ (*Gossypium arboretum* L.) で、12世紀になると一年生のクサワタ (*Gossypium herbaceum* L.) が伝わり、こちらの方が便利であったので急速に普及したとされている²⁾。

中国の衣料の歴史では新しい木綿布であるが、明代後期から清代にかけて急速に全土に普及し、広く人々の衣料として珍重された。その結果、上質の木綿布は、清代になるとヨーロッパに向けても輸出されるのである。その時は一般に 'Nankeens' と呼称されていた。

永らく明治期に、中国の領事を務めた上野専一がまとめた『支那貿易物産字典 一名支那通商案内』には、

紫花布ハ所謂ナンキン木綿ナリ。支那税目中ニ (Nankeen and Native Cotton Cloths. 土布各色) ト記ス。其洋名ノ「ナンキーン」ト云ヘルハ、此木綿布始テ南京地方ニ於テ織造輸出セシヲ以テ、其地方ヲ織物ノ名ト爲セシナラン。該貨製造ノ地方ハ先ツ江蘇、湖北、浙江、福建、廣東ヲ重ナル場所ト爲ス。支那人ハ上等人種ヨリ日雇苦力等ニ至ル迄、其下衣ハ都テ綿布ヲ用ユルヲ以テ土布ノ需用極テ多シ、或ハ青染ニシテ、上衣ニ用ユ。尤モ江蘇省ヨリ産出スルモノヲ上品トナス。³⁾

と述べるように、江南の南京を中心に生産された木綿布が Nankeen として海外に知られるようになったのである。

この木綿生産、木綿布織造の先進国であった清代中国に、廣東貿易によってインド棉花が輸入されてきたことはすでに指摘されている⁴⁾。一方では中国産の木綿布が世界へ進出していた乾

1) 森鹿三「中国の衣食の歴史地理」、森鹿三『東洋學研究 歴史地理編』東洋史研究會、1970年11月、436 (435-476) 頁。

2) 森鹿三「中国の衣食の歴史地理」、森鹿三『東洋學研究 歴史地理編』452頁。

3) 上野専一編『支那貿易物産字典 一名支那通商案内』丸善書店、明治21年(光緒14、1888) 4月、179 (1-418、附録1-46、漢名索引1-22) 頁。

4) 田中正俊「中国社会の解体とアヘン戦争」の「十八世紀廣東輸入貿易——毛織物とインド棉花」において、インド棉花の中国輸入が1704年に試験的に厦門に送られ、1780年代後半に飛躍的に増大し廣東輸入商品の首位を占めていたことを指摘されている。田中正俊『中國近代經濟史研究序説』東京大学出版会、1973年7月、132-134 (101-158) 頁。しかし、イギリス東印度会社との関係を考察され、中国国内事情については探求されていない。

隆年間に、中国へ木綿が海外から輸入されてきて、官憲を大いに悩ました問題がある。

そこで本稿は、木綿が中国で普及した時期になぜ木綿が輸入されたかを考えてみたい。

2 中国における棉花生産の展開

中国における木綿布の普及に関して、明代の丘濬の『大學衍義補』卷二十二、貢賦之常に、中国における木綿の展開を次のように記している。

蓋自古中国所以爲衣者、絲麻葛褐四者而已。漢唐之世、遠夷雖以木綿入貢、中國未有其種、民未以爲服。官未以爲調、宋元之間、始傳其種、入中國、關陝・閩廣首得其利。蓋此物出外夷、閩廣海通舶商、關陝壤接西域故也。然是時猶未以爲征賦、故宋元史食貨志、皆不載。至我朝（明朝）、其種乃徧布于天下、地無南北、皆宜之。人無貧富、皆賴之。其利、視絲枲、蓋百倍焉。

中国の古代において衣料として使用されていたのは、絲麻葛褐の四種、絲は生絲、蚕の作る繭から繊維を取りだし絲をもとに絲を織って布を作った。麻は、大麻、苧麻、黄麻、亞麻などの繊維から織って作り出した麻布。葛は、マメ科の多年草の蔓の繊維を織って作った葛布^{くずふ}。褐は、一般には粗末な衣と呼称された。漢代から唐代にかけてこのような布衣が人々の衣服として使用されていた。それが、宋、元代に、外国から陸路により西北の甘肅・陝西方面より、もう一方は福建・廣東方面に海外の船舶からもたらされた種子を播種して木綿が作られるようになり、その木綿を織って製造された木綿布が急速に普及し、明代には廣く知られるようになった。

この説は、趙翼も継承し、『陔餘叢考』卷三十「木綿布行於宋末元初」においても述べている。江南で棉花栽培が普及したのには、同書に「黄道婆自崖州來、教以紡織、人遂大獲其利」と記すように、黄道婆の海南島からの渡来と結び付けられている。

黄道婆について元の陶宗儀『南村輟耕録』卷二十四、黄道婆に次のようにある。

閩廣多種木綿、紡績爲布、名曰吉貝。松江府東去五十里許、曰烏泥涇、其地土田磽瘠、民食不給、因謀樹藝、以資生業、遂覓種於彼。初無踏車椎弓之製、率用手割去子、線弦竹弧置案間、振棹成劑、厥功甚艱。國初時、有一嫗名黄道婆者、自崖州來、乃教以做造捍彈紡織之具、至於錯紗配色、綜錢挈花、各有其法、以故織成、被褥帶悅、其上折枝團鳳、棋局字棣、粲然若寫、人既受教、競相作為、轉貨他郡、家計就殷。未幾、嫗卒、莫不感恩洒泣、而共葬之、又爲立祠、歲時享之。越三十年、祠毀、鄉人趙愚軒重立、今祠復毀、無人爲之

創建、道婆之名、日漸泯滅無聞矣。

木綿布の紡織を松江府に伝えた逸話が残され、松江府下の烏泥涇にあったとされている。明代の筆記史料、談遷の『棗林雜俎』智集に見える「松江布」が明代の木綿布を記している。

成化間、松江人以布餉貴近、流聞禁庭、下府司織、造赭黃大紅眞紫等色、龍鳳斗牛麒麟等紋、胥隸並緣爲奸、一匹有費白金百兩者。孝宗在東宮、深知其弊、即位首罷之、嘗閱內帑見之曰、此布一匹、文綺十匹價也。終身不一御、自是遂絶。

松江細布、輸京十二萬三千八百六十匹有奇、華亭六萬五千一百匹有奇、上海四萬二百七十七匹有奇、青浦二萬三千四十匹有奇、萬曆初加八千匹。

成化年間（1464～1487）において明朝廷では綿布が流行し、一匹の価格が白金百両とも言われ、さらに孝宗（1488～1505）が皇太子時代とあるから成化年間の末頃にはその弊害が極度に達していた。

16世紀の後半になると、松江府下から北京に輸送される木綿布は十二萬余匹にもなり、華亭が六萬五千余匹、上海が四萬余匹、青浦が二萬三千余匹と主要な産地であったことが知られる。

清初になると葉夢珠の『閩世編』巻七、食貨四、五に次のように上海地域の木綿布生産の状況を記している。

吾邑地產木綿、行於浙西諸郡、紡績成布、衣被天下、而民間賦稅、公私之費、亦賴以濟、故種植之廣、與粳稻等。(食貨四)⁵⁾

葉夢珠の郷里の上海近郊では木綿の生産が盛んとなり、棉花を使った織布は廣く普及しており、稲作と同等に見られるほど木綿栽培が普及していた。その木綿布の生産地と固有のブランド品が生産され、中国の各地に搬出されていた。

棉花布吾邑所產、已有三等、而松城之飛花、尤墩、眉織不與焉。上闊尖細者、曰標布、出於三林塘者爲最精、周浦次之、邑城爲下、俱走秦、晉、京邊諸路、每疋約值銀一錢五、六分、最精不過一錢七、八分至二錢而止。…其較標布稍狹而長者、曰中機、走湖廣、江西、

5) 來新夏點校『閩世編』明清筆記叢書、上海古籍出版社、1981年6月、156頁。

兩廣諸路、價與標布。前朝標布盛行、富商巨賈、操重資而來市者、白銀動以數萬計、多或數十萬兩、少亦以萬計、以故牙行奉布商如王侯、而爭布商如對壘、牙行非藉勢要之家不能立也。…（食貨五）⁶⁾

上海近郊で生産される木綿布には三種類があり、とりわけ‘標布’と呼称された木綿布が秦、晋、京すなわち陝西、山西、北京周辺などに普及していた。その後、標布よりやや狭く長い‘中機’が盛行し、湖北、湖南、江西、廣東、廣西などに展開していたとされる。このため木綿布を扱う商人が暗躍し、とりわけ牙行の中には王侯とまで見られるほどの蓄財をした。

木綿布を製造する江南の状況は錢泳の『履園叢話』叢和二十三、雜記上、「換棉花」に見られる。

余族人有名焜者、住居無錫城北門外、以數百金開棉花莊、換布以爲生理、鄰居有女子、年可十三、四、嬌艷絕人、常以布來換棉花、焜常多與之、並無他志也。⁷⁾

おそらく錢泳の一族である錢焜が無錫の城門北で棉花莊を開設し、そこへ常に棉花を取りに来て木綿布を織って持ってくる13、4歳の可愛い子女がいた。焜は常に多めに棉花を渡していたと言うことで始まるが、話は、後に焜が破産して流浪して北京にたどり着いたのが10余年後のことであった。その落ちぶれた焜を救済してくれたのが、大家の奥様になっていたその女の子であったと言う話である。この話は錢泳が乾隆初年のことと言っているので、1730年代のことであろう。この頃には江南では、棉花布は家庭の婦女が恒常的に織布していたことは確かである。

当時の地方志にもその事実が頻出する。

崇禎『松江府志』卷七、風俗、俗業に、

紡織不止、鄉落雖城中亦然、里媪晨抱綿紗入市、易木綿花以歸、機杼軋軋、有通宵不寐者。

とあり、明末の崇禎年間もしくはそれ以前の松江府下や城内では、婦女による木綿布の織布が盛んに行われていた。

蘇州織造であった李煦も康熙三十四年（1695）九月の奏摺に次のように記している。

6) 來新夏點校『閩世編』、157頁。

7) 張偉校點『履園叢和』上下、中華書局、1979年12月、下冊623頁。

查今年四月内、奉戸部行文、着令織造衙門採辦青藍布三十萬疋、遵照定價已經如數辦足解交戸部外、但此項布疋出上海一縣、民間於秋成人之後、家家紡織、賴此營生、上完國課、下養老幼。⁸⁾

蘇州織造であった李煦が戸部に収めた青藍布30萬疋は、上海縣において生産されたもので、それを製造したのは、上海縣下の民間の人々であった。彼等は紡織により生計をたて、政府に納めるのみならず、この紡織によって老人や幼子を養育していたのである。

嘉慶『松江府志』卷五、風俗にも、

我松江風俗…至於鄉村紡織、尤尚精敏、農暇之時、所出布匹、日以萬計、以織助耕、紅女有力焉。⁹⁾

と見られるように、松江府下の鄉村では紡織が盛んで、農閑期にはとくに多くの棉花布が製造されていた。その紡織の主力は幼年の子女であった。

木綿布の製造だけではなく、加工業も進展し、雍正元年（1723）四月五日付の蘇州織造胡鳳翬の奏摺によれば、「有染坊、踹布工匠、俱係江寧・太平・寧國人民在蘇、俱無家室、総計約有二萬人」¹⁰⁾とあり、蘇州には染色を行う染坊や、加工の過程で生じた皺のばしを行う踹布工匠と言う専門業者がいたのである。これらの人々は江寧すなわち南京や安徽省の太平府、寧國府の出身者で占められ、総計二萬人もいたと言われる。

また踹布工匠は踹坊を設けていた。雍正八年（1730）七月二十五日付の浙江總督管江寧巡撫の李衛等の奏摺に、

細查蘇州閭門外一帶、充包頭者、共有參百肆拾餘人、設立踹坊肆百伍拾餘處、每坊容匠、各數拾人不等、查其踹石已有壹萬玖百餘塊、人數稱是實、…查蘇城地方人衆叢雜者、莫如胥閭貳門外、起自虎邱前後山塘南北濠、楓橋西園一帶、爲長・吳・元參縣、犬牙相錯之處、不可但踹匠萬餘人、咸聚于此、而各省商賈帆檣鱗集。¹¹⁾

8) 故宮博物院明清檔案部編『李煦奏摺』中華書局、1976年5月、6頁。

9) 『中國地方志集成 上海府縣志輯1』上海書店、1991年6月、153頁。

10) 『宮中檔雍正朝奏摺』第1輯、國立故宮博物院、1977年8月、163頁。

11) 『宮中檔雍正朝奏摺』第16輯、國立故宮博物院、1979年2月、748頁。

とあり、蘇州の閭門外には踹坊が450余箇所もあり、各坊には工匠が數十人もいて、道具である踹石はおよそ一萬900塊もあったとされる。そして作業に関係する職人である踹匠は1万人以上がいたと言われるのである。それだけ木綿布の加工業が盛んであった¹²⁾。

このような中国産の木綿布が廣東省廣州の外国貿易によって海外へ輸出されていた。清代廣州の海外貿易に関して多くの成果があり、最近でも范岱克 (Paul A. Vam Dyke) 著、江滢河・黄超譯『廣州貿易 中国沿海的生活與事業 (1700~1845)』¹³⁾ も見られるが、木綿布の問題は看過されている。

イギリス東印度会社の貿易品を扱ったWilliam Milburnの“*Oriental Commerce containing A Geographical Description of the Principal Places in the East Indies, China, and Japan.*” (以下“*Oriental Commerce*”と略称) のChapter XXVIIIのChinaにNankeensとして次のように見られる。

There are two kinds of nankeen cloth bought from China, the broad and the narrow; the former is what is commonly called the Company's nankeen, and is the sort best suited to the home consumption; the finer they are, the more they are esteemed: the narrow are comparatively of small value. ... The French used to import large quantities of nankeens from China.¹⁴⁾

中国からヨーロッパにもたらされる南京木綿布には廣幅のものと細幅との2種類があった。前者は一般にイギリス東印度会社の‘ナンキン’と呼ばれ、家庭消費に最も適していた。それは細かければ細かいほど珍重されていた。幅狭のは比較的安価であったとされている。…フランスは、中国からナンキン木綿を大量に輸入し使用していたのであった。

H. B. Morse が紹介した廣州から輸出されたNankeensの記録が知られる。

The Harrison received at Batavia an account of the Normanton's experiences at Ningpo

12) 蘇州の踹布業の詳細に関しては、寺田隆信「蘇州踹布業の經營形態」(寺田隆信『山西商人の研究』東洋史研究會、1972年11月、337-410頁収録)がある。

踹布業の史的 연구には横山英「踹布業の生産構造」、横山英『中国近代化の經濟構造』亜紀書房、1972年3月、61-143頁がある。

13) 范岱克 (Paul A. Vam Dyke) 著、江滢河・黄超譯『廣州貿易 中国沿海的生活與事業 (1700~1845)』社会科学文献出版社、2018年4月、1-324頁。

14) William Milburn, “*Oriental Commerce containing A Geographical Description of the Principal Places in the East Indies, China, and Japan.*” London, 1813, p.514.

in 1736; her supercargoes changed her destination to Canton. There they acted as separate Council, loading for London 2,740 piculs of tea, 7,750 pieces of silks, and 9,370 pieces of nankeens.¹⁵⁾

ハリソン号はバタヴィアで、1736年に寧波のノルマントン号の貿易取引を受け取った。同号の貨物上乗人が同号の目的地を廣州に変えた。彼らは別の評議会の指示により、ロンドンへ、2,740ピックルのお茶、7,750枚のシルク、9,370枚のナンキンを積み込んでいる。

ハリソン号がロンドンに向けて運んだナンキン棉花布は、ノルマントン号が、寧波で購入したお茶やシルクやナンキンであったと考えられることから、ナンキンは江南産の棉花布であった可能性が高いであろう。

その後、1736年にイギリス東印度会社は、廣東行商 Young Khiqua からお茶や瓷器やナンキンと金など50,348Tls.を購入した¹⁶⁾。1739年には、東印度会社船の Walpole 号と Houghton 号のロンドンへの積荷に ‘Cotton cloth, 513 pieces’¹⁷⁾があった。明らかに棉花布であるが、産地は不明である。1740年には ‘Nankeens, 4,000 pieces’¹⁸⁾を購入している。ついで、1741年のイギリス東印度会社と地方貿易船、フランス、ドイツ、スウェーデン、デンマークの廣州での取引額が知られるが、Nankeens は、東印度会社のみが15,699pieces¹⁹⁾を購入した。また1750-1751年の廣州での1741年と同様な国の中で東印度会社のみが Nankeens を5,740pieces²⁰⁾を購入している。

1781年の H. B. Morse の記録から、イギリス東印度会社が購入したナンキン布の形状がわかる。

At this period the Company was regularly sending each year to England 20,000 pieces of nankeens, 6 yards long, 13 1/2 inches wide, costing Tl. 0.400 a piece.²¹⁾

この時期に、イギリス東印度会社は毎年20,000piecesのナンキンを購入してロンドンに運んでいた。その形状は、長さが6ヤード、幅は13 1/2インチで単価は一件につき0.4両であった。

15) H. B. Morse, “*The Chronicles of East India Company trading to China 1635-1834*”, Oxford, 1926, Vol.I, p.257.

16) *Ibid.*, p.255.

17) *Ibid.*, p.271.

18) *Ibid.*, p.275.

19) *Ibid.*, p.282.

20) *Ibid.*, p.292.

21) H. B. Morse, “*The Chronicles of East India Company trading to China 1635-1834*”, Oxford, 1926, Vol.II, p.257.

現在の m 法に換算すると長さが約5.5m、幅が約34.3cmであったことがわかる。この大きさの木綿布を毎年イギリス東印度会社は20,000枚を購入していたと見ることができよう。

1792年（乾隆57）に廣州から欧米に輸出された Nankeen Cloth ナンキン棉花布の数量²²⁾が知られ、それを表示し、さらに各国船の割合比率を加えた。

国別、船籍（隻数）	Pieces	Tales	%	貿易額の%
Company's Ship (20)	60,000	30,000	13.3	0.7
Country Ship (20)	5,000	2,750	1.2	0.28
French ship (2)	228,000	114,000	50.7	31.5
Swedish Ship (1)	35,000	17,500	7.8	6.3
Danish Ship (1)	43,000	21,000	9.3	9.2
Dutch Ship (4)	47,000	23,500	10.5	4.4
American Ship (4)	27,400	13,700	6.1	4.3
Genoa Ship	5,000	2,500	1.1	2.9
合計		224,950	100	3

清末になっても上海を中心とする棉花布の生産は盛んであった。王韜の『瀛滬雜誌』巻二に、

滬土性宜木棉、若植禾稻、收成較歉、故播種者因地以製宜、郊原高曠、川澤沃衍、有潮汐之利、以資灌溉、事半而功倍。惟八月風濤浸齧、亦能為害、相傳木棉一種、黃嫗得自崖州、從海舶攜歸、始教之藝、被其德者數百年、可謂遠且溥矣。宜邑民之報賽無虛日也。……

滬人生計在木棉、販輸遠及數省、今則且至泰西各國矣。在滬業農者、罕見種稻、自散種以及成布、男播女織、其辛勤倍於禾稼、而利亦贏。鄉人稱木棉統謂之花、木棉有核如梧子較大、每年登場後、取棉花之衣厚核重者藏之、至明歲春間、軋取花核、四月便宜鋤地種花、種法有二。

と記されるように、上海近郊の農村では棉花栽培が、土壤に適していたことから盛んに行われていた。その棉花から製造する棉花布は、中国国内のみならず海外へも輸出されていたのである。清代における沿海貿易によって江南の木綿布がいわゆる‘土布’として沿海各地に流通していた²³⁾。

22) Ibid, pp. 203-204.

23) 清代福建における棉花の沿海航運による流入と織布との関係を論じている。田中正俊「西欧資本主義と旧中国社会の解体——「ミッチェル報告書」をめぐった——」の四「「ミッチェル報告書」における中国綿業の生産・流通構造」参照、田中正俊『近代經濟史研究序説』177-189（159-202）頁。
江南土布としての棉花布が東北に流通していた。松浦章「清代上海沙船航運業と南貨：上海棉布の流通」、

このように清代中国は、世界でも棉花の最大生産地で、最先端、高品質の棉花布を産出していた国であったが、この清朝時代に外国から棉花が輸入されてきたことが大きな問題となった。このことについて、次に述べたい。

3 乾隆年間イギリス東印度会社による外国産棉花の輸入

海外から清朝中国に棉花が輸入されてきたことを最初に取り上げたのが、乾隆四十二年（1777）に大学士管雲貴總督であった李侍堯である。彼が問題提起した「籌制緬甸機宜疏」によれば、次のように見られる。

跪奏爲緬甸邊務未結、敬陳一得之愚、祈聖裁事、…伏查緬甸、自乾隆三十四年大兵圍老官屯槽駁勢窮力蹙情願、納貢還人、籲請罷兵、…臣留心察訪緬地物產、棉花最多、次則碧霞璽・翡翠玉、其仰給於內地者、不過綢緞貢絲鐵針之類、近年以來、彼處玉石等物、雲南・廣東二省、售賣頗多、皆由內地、每差土人擺夷。出關探偵、盤查兵役因見官差要務、於隨身行李、搜檢未嚴、夾帶私走勢所不免、究之偵探者、止在野人地界、摭拾無稽、不但不能得彼真情、轉將內地信息、從而洩漏、²⁴⁾

清朝と緬甸との国境を接する雲南において、乾隆三十四年（1769）以来国境をめぐる紛争が生じていたが、遅々として進まず進展が見られ無かった。その緬甸の特産は棉花が最大の生産量を誇っていた。さらに玉石とされる碧霞・璽玉・翠玉があり、これらは少量で高価であることから、中国へ簡単に供給されていたようである。とりわけ緬甸に近い雲南、廣東省においてそれらが売買され、乾隆中期には緬甸国境に赴く人々が、携帯荷物の中に持ち込んで運び出すことが数多くあったが、国境での検査がおぼつかなかったのである。

さらに、携帯品に混入できる宝石類とは別に、新たな問題が生じた。

至於棉花一項、臣在粵省時、見近年外洋港脚船隻進口、全載棉花、迨至出口回帆、又買帶些須白糖白礬、船多稅少、頗累行商、臣與監督德魁嚴行飭諭、嗣後倘再混裝棉花、入口不許交易、定將原船押逐在案、外洋海道各國皆通、臣初不知緬地多產棉花、今到滇後、聞緬匪之晏共・羊翁等處、爲洋船取泊交易之所、以臣在粵所見核之、在滇所聞緬地棉花、悉從

松浦章『清代上海沙船航運業史の研究』関西大学出版部、2004年11月、207-217頁。

24) 『皇清奏議』卷、六十二所収。

海道帶運、似滇省閉關禁市、有名無實、究不足以制緬匪之命。²⁵⁾

李侍堯が廣東省に在動してた時のこととしている。李侍堯は字が欽齋、漢軍鑲黃旗人²⁶⁾の出身で、最初に廣州に勤務するのは乾隆二十年（1755）十一月に廣州將軍となり乾隆二十四年（1759）正月²⁷⁾に總督になるまで就任している。兩廣總督になったのは、乾隆二十三年（1758）四月に廣州將軍と兼務として就任してから乾隆二十六年（1761）、二度目が乾隆二十九年（1764）六月から乾隆三十年六月、三度目が乾隆三十二年（1767）三月から乾隆四十二年（1777）正月までで、ちなみに雲貴總督には同正月から乾隆四十五年（1780）二月まで就任している²⁸⁾。このことから乾隆二十年（1755）から乾隆四十二年（1777）まで、ほぼ22年にわたり、廣州を中心に廣東省を基盤とする地方官に就任していた。このことから廣州の外国貿易には精通していたと言えるであろう。『清史稿』の李侍堯の傳には、彼の廣東での業績の一端として、次の上奏の一部を記録している。

〔乾隆〕二十四年、實授總督。奏、廣東各國商舶所集、請飭銷貨後依期回國、不得住冬、商館毋許私行交易、毋許貸與內地行商贖本、毋許雇內地廝役。二十五年、又奏、粵海關各國商舶出入、例於正稅船鈔外有各種規禮、應請刪除名色、併為歸公銀若干。各口僕役飯食、舟車諸費、於此覈銷。並下部議行。²⁹⁾

乾隆二十四年（1759）、二十五年にわたった廣州の海外貿易に関する重要な提案を行っている。二十四年は、外国商人の廣州の滞在期間や、廣東行商と外国商人との資金貸与などの禁止などを提案し、乾隆二十五年、外国商人の貿易取引の経費などの正常化を提議している。

その李侍堯が問題視したのは「見近年外洋港脚船隻進口、全載棉花、迨至出口回帆、又買帶些須白糖白礬、船多稅少、頗累行商」のことである。廣州に来航する「外洋港脚船」すなわちイギリス東印度会社のCountry Shipとは、イギリス東印度会社の許可を得て、インドから中国へ貿易に来る貿易船のことである。この船が最近、積載貨物のほとんどが棉花で、帰帆には税額の低い白糖や白礬のみを持ち帰るため、廣州の貿易としては中国側には利益が出なく、廣東行商にとっても、好ましい状況ではなかった。

25) 『皇清奏議』 卷、六十二所収。

26) 『清史稿』 卷三百二十三、列傳百十。『清史稿』 36冊、中華書局、1977年2月、10817頁。

27) 錢實甫編『清代職官年表』 第三冊（全四冊）、中華書局、1980年7月、2286-2290頁。

28) 錢實甫編『清代職官年表』 第二冊（全四冊）、中華書局、1980年7月、1416-1429頁。

29) 『清史稿』 36冊、10818頁。

李侍堯の提議は何時のことであつたらうか。『高宗實錄』卷一千三十一、乾隆四十二年（1777）四月戊午（二十三日）の条に次のようにある。

諭軍機大臣曰、李侍堯奏、籌辦緬甸邊務情形。所慮亦是。已於摺內批示。據稱、緬匪屢以詭詞欺誑。藉此窺我動靜。其反復已非一次。甚為可惡。查從前定議閉關禁市。絕其資生之路。原屬制緬要策。現在該酋來稟。亦籲懇開關。使生計果真窘迫。自當力圖完局。因何屢有變更。茲悉心體訪。緬地物產。棉花頗多。次則碧霞玳。翡翠玉。近年以來。彼處玉石等物。雲南、廣東、二省售賣頗多。皆由內地、每差土人擺夷。出關偵探。兵役因見官差要務。於隨身行李。搜檢未嚴。夾帶勢所不免。究之所偵探者。止在野人地界。撫拾無稽。不但不能得彼真情。轉將內地信息。從而洩漏。至棉花一項。臣在粵省時。見近年外洋腳船進口。全載棉花。頗為行商之累。因與監督德魁、嚴行飭禁。嗣後倘再混裝棉花入口。不許交易。定將原船押逐。初不知緬地多產棉花。今到滇後。聞緬匪之晏共、羊翁等處。為洋船收泊交易之所。是緬地棉花。悉從海道帶運。似滇省閉關禁市。有名無實等語。所陳悉中緬匪情弊。著傳諭楊景素、會同李質穎、德魁、於海口嚴行查禁。如有裝載棉花船隻。概不許其進口。務當實力奉行。勿以空言塞責。仍不時留心訪察。如有胥役等受賄私放者。立即重治其罪。³⁰⁾

李侍堯の「籌辦緬甸邊務情形」と、彼の「籌制緬甸機宜疏」から引用したものと言えるから、乾隆四十二年四月二十三日の上諭が発せられた際に、李侍堯の上奏を根拠にしたものであることがわかる。

事実、『乾隆朝上諭檔』に収録された上諭は、

大学士于 字寄 協辦大学士尚書公阿 大学士管雲貴總督李 兩廣總督楊
乾隆四十二年四月二十三日奉上諭、李侍堯奏籌辦緬甸邊務情形一摺、所慮亦是已於摺已非一次、甚為可惡查、從前定議閉關禁市、絕其資生之路、原屬制緬要策、現在該酋來稟亦籲懇開關、使生計果真窘迫、自當力圖完局。因何屢有變更。茲悉心體訪。緬地物產。棉花頗多。次則碧霞璽。翡翠玉。近年以來。彼處玉石等物。雲南、廣東二省售賣頗多。皆由內地、每差土人擺夷。出關偵探。兵役因…³¹⁾

と見られるように、李侍堯の上奏をほぼ引用している。この上諭に関連して、

30) 『清實錄』第21冊、中華書局、1986年4月、819-820頁。

31) 中国第一歴史檔案館編『乾隆朝上諭檔』第8冊、1991年6月、628（628-631）頁。

大学士于 字寄 盛京福州將軍 直隸兩江閩浙山東各督撫

乾隆四十二年四月二十五日奉上諭、昨據李侍堯奏摺在粵省時、見近年外洋脚船進口。全載棉花。頗為行商之累。因與監督德魁、嚴行飭禁。嗣後倘再混裝棉花入口。不許交易。定將原船押逐。初不知緬地多產棉花。今到滇後。聞緬地土產棉花最多、而緬匪之晏共、羊翁等處。尤為洋船收泊交易之所。是緬地棉花。悉從海道帶運。似滇省閉關禁市。有名無實等語。所奏甚是、業經傳諭楊景素、會同李質穎、德魁、於海口嚴行查禁矣。外洋海面處處皆通、因粵省各口查禁、復往他省混行入口、亦未可定、況內地處處出產棉花、供用極為寬裕、何藉取給外洋、與之交易、致滋弊混、著傳諭凡有海口之將軍、督、撫、設法嚴行查禁、如有裝載棉花船隻、概不許其進口、務令實力奉行、勿以空言塞責、仍不時留心訪察、或有胥役等受賄私放者、立即重治其罪、仍將如何設法查禁之處、具摺覆奏、將此遇各該將軍督撫奏事之便、傳諭知之、欽此遵旨寄信前來。³²⁾

とある。この部分にはほぼ、『高宗實録』卷一〇三一、乾隆四十二年四月庚申（二十五日）の条³³⁾に引用されている。李侍堯が廣東省で地方官を務めた時期に、海外から来航する「外洋脚船」すなわちイギリス東印度会社の地方貿易船の全てが棉花を搭載し、廣東行商らを煩わせていた。そこで粵海關監督であった德魁と李侍堯とが、これを厳しく禁止し取締りを行い、棉花を貨物に混載してくることがあったら、廣州での交易を許可せず、直ちに棉花積載の船舶を積戻しにすることにした。緬甸が棉花の産地であることを知らず、李侍堯が雲南に赴任して後に、緬甸の地では棉花が最大の産地である事を知った。緬甸の「晏共、羊翁等處」は外国船が交易する地で、緬甸の棉花は全て海上航路によって運ばれてきたのであった。晏共は現在の仰光³⁴⁾ ヤンゴンである。

それでは、李侍堯がいつこの問題を提起したかと言えば、彼の記した奏摺が知られる。『宮中檔乾隆朝奏摺』第38輯に収録された「大学士仍管雲貴總督昭信伯」として記した李侍堯の奏摺は、

跪奏、爲緬甸邊務未結、敬陳一得之愚、仰祈聖裁事、竊臣荷蒙恩、命調任雲貴總督、…³⁵⁾

32) 中国第一歴史檔案館編『乾隆朝上諭檔』第8冊、631頁。

33) 『清實録』第21冊、823-824頁。

34) 余定邦・黄重言編『中国古籍中有緬甸資料匯編』中冊（全3冊）、中華書局、2002年12月、649頁。

35) 『宮中檔乾隆朝奏摺』第38輯、国立故宮博物院、1985年6月、308（308-311）頁。

で始まる奏摺中に、

茲臣留心體訪緬地物產、棉花最多、次則碧霞璽・翡翠玉、其仰給於內地者、不過綢緞黃絲鐵針之類、近年以來、彼處玉石等物、雲南・廣東二省、售賣頗多、皆由內地、每差土人擺夷。出關探偵、盤查兵役因見官差要務、於隨身行李、搜檢未嚴、夾帶私走、勢所不免、究之偵探者、止在野人地界、撫拾無稽、不但不能得彼真情、轉將內地信息、從而洩漏。至棉花一項、臣在粵省時、見近年外洋港脚船隻進口、全載棉花、迨至出口回帆、又止買帶些須白糖・白礬、船多稅少、頗累行商、經臣與監督德魁、嚴行飭諭。嗣後倘再混裝棉花入口。不許交易。定將原船押逐在案。外洋海道各國皆通。臣初不知緬地多產棉花、今到滇後。聞緬匪之晏共、羊翁等處、為洋船收泊交易之所。所以臣在粵所見徵諸在滇所聞、是緬地棉花、悉從海道帶運。否則粵東近年何獨驟多、似滇省閉關禁市、有名無實、究不足、以制緬匪之命、且邇年鎮將大員帶兵數千駐守、非惟不成、事體而此局一日不究、一日上煩睿慮。…³⁶⁾

として、乾隆四十二年四月初九日（1777年5月15日）付で奏摺が記された。この奏摺を参考にして、乾隆帝の上諭が、乾隆四十二年五月二十五日（6月29日）に出された。李侍堯が奏摺を認めた日付から上諭が出されるまで46日を要している。それは雲貴總督を勤めていたおそらく雲南の昆明から北京までの伝達時間を考えれば³⁷⁾、決して遅くはなかった。

この李侍堯の奏摺を根拠として、廣州貿易の棉花輸入問題が展開していくのである。

緬甸に関して記された清朝の文献には次のように見られる。

『清朝文献通考』卷二九六、四裔考四に、緬甸と中国との貿易が見られ、

緬甸、古稱朱波國、地界雲南永昌府…老官屯地多海鹽、恒與內地民人貿易。土產有蘇木、象牙、木綿之屬。³⁸⁾

とあり、緬甸の辺境と中国辺境が接していることから中国商人との国境を越えての貿易が行われていた。緬甸の産物には蘇木や象牙そして棉花があった。

『清朝續文献通考』卷三三三、四裔考三、緬甸には、

36) 『宮中乾隆朝奏摺』第38輯、309頁。

37) 松浦章「清朝皇帝康熙帝の訃報と東アジア世界」、『或問』第16号、2009年7月、5(1-18)頁。急を要した皇帝康熙帝の訃報が、北京から昆明に到着したのが32日後であった。

38) 『清朝文献通考』第2冊（全2冊）、浙江古籍出版社、2000年1月、考7455頁。

緬甸一名阿瓦種人之名、蠻部大國也。…物産五金、石油、紅藍寶石并五穀、木綿、糖蔗之屬。五洲地理志、商埠之大者、在南爲仰光、爲巴森、爲穆爾臺、爲厄開焙。³⁹⁾

とあり、緬甸の産物には金や石油そして宝石の他に棉花もあり、貿易の港は南では仰光すなわち Yangon が知られていた。

しかし、中国と緬甸との貿易は主として、謝清高『海録』の烏土國に、なお烏土國は緬甸のことであるが、次の記述に見られるように、

北境與雲南、緬甸接壤、雲南人多在此貿易。⁴⁰⁾

とあるように、緬甸と国境を接する雲南省との国境において交易が行われることが一般的であった。

ところが、李侍堯が指摘するように、「外洋港脚船」によって、緬甸の棉花が輸入されてくるのである。

H. B. Morse, “*The Chronicles of East India Company trading to China 1635-1834*”, によれば、廣州にイギリス東印度会社の船によって Cotton 棉花が運ばれてきたのは1735年(雍正13)のことで、Richmond 号が605piculs をもたらし、単価が8.5tls であり、5,143Tls であったと言う⁴¹⁾。1739年に廣州に来航した Houghton 号は、ボンベイ Bombay からキャンディを含んで、Cotton が250包がもたらされた⁴²⁾。1742年(乾隆7)には、Onslow 号がインド産の Cotton を870piculs をもたらし、単価が6.20tls で、5,394tls であった⁴³⁾。1750年にはオランダ船が9,768piculs⁴⁴⁾ をもたらした。そして、1777年になると状況が一変する。

The only actual difficulty which the Council of 1777 had with the officials was in connexion with cotton, it being notified on June 10th that the Foyuen had received from the Emperor an Order to prohibit the Importation and Sale of Cotton at Canton this Season.⁴⁵⁾

39) 『清朝續文獻通考』第4冊(全4冊)、浙江古籍出版社、2000年1月、考10732頁。

40) 余定邦・黄重言編『中国古籍中有緬甸資料匯編』下冊、中華書局、1081頁。

41) H. B. Morse, “*The Chronicles of East India Company trading to China 1635-1834*”, Vol. I, p.238.

42) Ibid. p.265.

43) Ibid. p.283.

44) Ibid. p.292.

45) H. B. Morse, “*The Chronicles of East India Company trading to China 1635-1834*”, Vol. II, p.24.

1777年イギリス東印度会社の理事会が、綿花に関する唯一の困難な問題は、Fouyuen が Canton のこの季節における木綿の輸入と販売を禁止する命令を皇帝から受けたことを6月10日に通知されたことであった。皇帝から棉花の輸入禁止に関する命を受けたとされる Fouyuen とは、乾隆三十一年（1766）九月から三十九年三月、また乾隆三十九年九月から四十三（1778）年二月まで粵海監督であった德魁⁴⁶⁾（De Kui 粵音：Dek Fui⁴⁷⁾）と思われる。

The Emperor having receive Intelligence from the Tsongtoc of Yunnan, the People of Pegu, by means of the Cotton they sold to Europeans, were enabled to maintain their opposition against the Chinese, gave orders that no Cotton should be imported by the Europeans into the Empire of China. Since that time the Government of Pegu have submitted and agreed to deliver up the Son of a Tsongtoc, whom theu had a considerable time detained prisoner; the Emperor therefore having now no longer any reason to be at variance with the said People, hereby orders the Mandarins to acquaint the Europeans, that they are at Liberty to carry on their trade in Cotton at Canton as usual.⁴⁸⁾

雲南省の Tsongtoc すなわち總督（Zong-du 粵音：Dzug-duk）からヨーロッパに売られていた棉花を、中国に持ち込むと言う情報を得た皇帝、乾隆帝は、ヨーロッパ人が中国に輸入するべきではないという命令を下した。

廣州の外国貿易に関する史料とも言うべき梁廷柅の『粵海關志』卷十八、禁令二。棉花之禁には次の禁令が見られる。

乾隆四十二年四月、聖諭、李侍堯奏、前在粵省時、見近年外洋脚船進口、全載棉花。頗為行商之累、因與監督德魁、嚴行飭禁、嗣後倘再混裝棉花入口。不許交易。定將原船押逐、初不知緬地多產棉花、今到滇後、聞緬匪之晏共、羊翁等處、為洋船收泊交易之所。是緬地棉花、悉從海道帶運、似滇省閉關禁市、有名無實等語。所陳悉中緬匪情弊、著傳諭楊景素、會同李質穎、德魁、於海口嚴行查禁、如有裝載棉花船隻、概不許其進口。務當實力奉行、勿以空言塞責、仍不時留心訪察、如有胥役等受賄私放者、立即重治其罪。⁴⁹⁾

46) 梁廷柅、袁鐘仁校注『粵海關志』廣東人民出版社、2002年2月、131-132頁。

47) 黃港生編『商務新字典』香港・商務印書館、1991年8月第1版、1994年4月第6次印刷、215、796頁。

48) Ibid, Vol. pp.24-25.

49) 梁廷柅、袁鐘仁校注『粵海關志』357頁。

しかしイギリス東印度会社は自由であり、いつものように木綿で貿易を続けようとしていたのである。

With continuity in the Canton trade, the supercargoes no longer closing up all accounts and sailing away in their ships, there had come a change in methods. In the Company's transaction advances were common, and current account were kept, the balances being generally due to the Company, and some times to the merchants.⁵⁰⁾

廣州貿易の継続のために、スーパーカーゴ貨物上乗人は、もはやすべての口座を閉鎖せず、彼らの船で帆走したが、方法を変更したのである。東印度会社の取引の進展には共通点があり、当座勘定は維持され、残高は一般的に同社のもので、時には商店主にとっても同様であった。

イギリス東印度会社は、廣州での棉花の中国輸入の禁止にもかかわらず、棉花を中国へ輸出していた。1778年の中国の輸入には、東印度会社の船が7,020piculsであったのに対し外洋港脚船とCountry shipsが19,344piculs⁵¹⁾と東印度会社船の約2.8倍の量であった。1783年のことであるが、H. B. Morseは、Tin (錫) Pepper (胡椒) Cotton (棉花) Putchuck Sharks' Fins (魚翅) Lead (鉛) のヨーロッパと中国の価格を示している⁵²⁾。

1783年（乾隆48）東印度会社取扱品の歐洲・中国価格比較表

品名	歐洲価格 (Tls.)	中国価格 (Tls.)	中国価格 / 歐洲価格
Tin (錫)	15.00	17.20	1.15
Pepper (胡椒)	10.00	12.50	1.25
Cotton (棉花)	9.50	15.00	1.58
Putchuck (木香)	18.00	23.00	1.28
Sharks' Fins (魚翅)	18.00	24.00	1.33
Lead (鉛)	4.00	5.55	1.39

注：Putchuck はインドのBombay から中国に輸入され、薬剤や焼香などに使われた⁵³⁾。

この表から見えてくるのは、インド産の物産を中国かヨーロッパに運んだ場合にどれが最も利益を生み出すかがわかる。その中で、棉花が最も利益率が高かったことがわかる。ヨーロッ

50) Ibid, Vol. p.25.

51) H. B. Morse, "The Chronicles of East India Company trading to China 1635-1834", Vol. II, p.31.

52) Ibid. p.91.

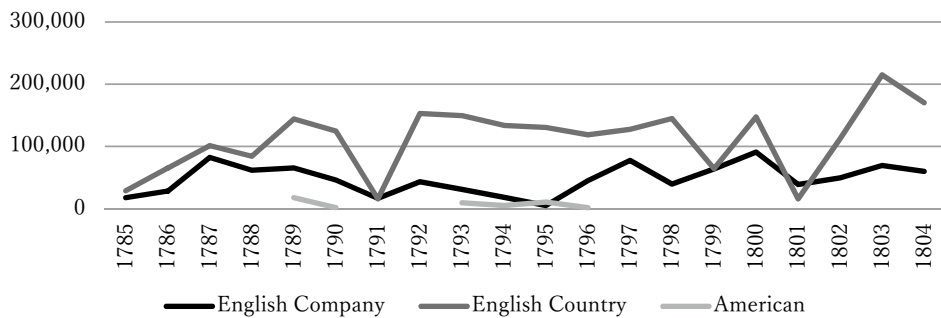
53) 上野専一編『支那貿易物産字典 一名支那通商案内』14、257頁。

パへ運ぶより、中国へ運ぶ方が大きな利益を生み出したのである。

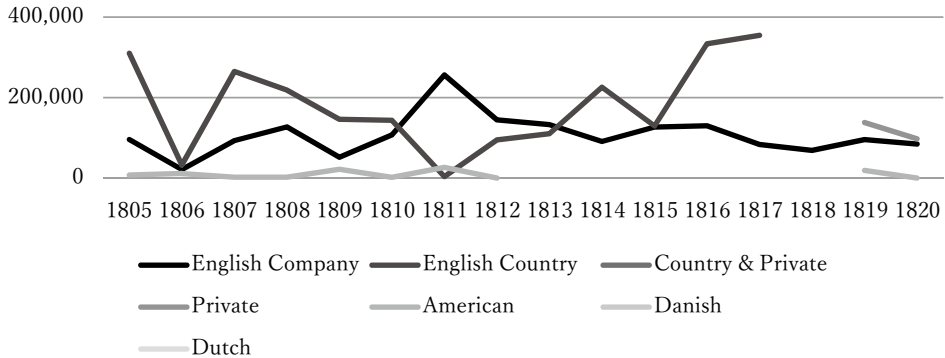
H. B. Morse の記録から、1785年からしばらく、中国が輸入した棉花の量を見てみたい。表中の出典は、H. B. Morse, “*The Chronicles of East India Company trading to China 1635-1834*”, Vol. II の頁数である。

国名 \ 年	1785	1786	1787	1788	1789	1790	1791	1792	1793	1794
English Company	17,389	28,120	82,150	61,632	65,429	45,823	16,529	43,138	30,780	17,994
English Country	28,600	65,130	101,161	84,168	143,952	124,558	15,505	152,884	149,430	133,687
American					17,411	1,432			9,363	4,964
French						411		82		
Dutch							273			2,209
Danish	632	322								
Prussian	983									
Spanish	798									
Italian (Leghorn)			4,000							
Swedish								5,452	4,600	
Genoese, Tuscan								2,302		
出典 (頁数)	111	119	136	152	173	180	184	193	205	256

国名 \ 年	1795	1796	1797	1798	1799	1800	1801	1802	1803	1804
English Company	4,929	44,955	77,445	39,483	63,709	90,764	38,571	49,287	69,228	59,751
English Country	130,363	118,668	127,287	144,756	64,122	147,222	15,619	112,151	214,959	170,200
American	10,412	1,500					1,873		383	
Danish		6,326	709	1,014						
Spanish		105								
出典 (頁数)	266	278	294	311	322	348	358	389	401	416



1785-1804年廣州貿易の棉花輸入額推移



1805-1820年廣州輸入棉花推移



1821-1833年廣州輸入棉花推移

1785年から1804年までの廣州に輸入された棉花の数量の推移を見てきたが、イギリス東印度会社の貿易船によっても輸入されていたが、それを圧倒する数量を輸入していたのが地方貿易船であったことが明らかである。とくに1792年（乾隆57）から1798年（嘉慶3）までの七年間は会社船より2-6倍もの数量が、中国へもたらされた。その後も、会社船と地方貿易船の輸入量が逆転するが、1826年までほぼ、地方貿易船がほぼ上位にあったことがわかる。ところが、1819年、1820年にはPrivate貿易、イギリス商人による自由貿易が現れ、1827年には地方貿易船にかわって、Private貿易船が会社船を圧倒して1833年まで続くのである。

1834年の廣州貿易の記録であるが、Cottonについて次のようにある。

Cotton. Of this import we need only enumerate the different kinds. The raw cotton is brought mostly from Bombay and Bengal in English ships; it sells from 9 to 13 taels percul. Except sheetings, which are from America, cotton piece goods come principally from

England, the chief articles of which are cambries, muslins, chintzes and long-clothes. In selecting these goods for this market, especially chintzes, those should be chosen which are well covered with large, gay flowers and leaves; a green ground is preferred. No formal figures, nor any Chinese representations are suitable. Good, unbleached long-cloths are the most suitable; cambrics are not in much demand. Canton yarn comes from England and India; that from numbers 22 to 45 is the most saleable. The sale of cotton goods of all description is annually increasing. The Chinese tacitly acknowledge their superiority, by slowly adopting them in the place of their own good.⁵⁴⁾

棉花が廣州貿易で輸入されていた。加工されいない棉花は、英国船によってボンベイとベンガルから運ばれていた。それらは一単位が9から13両で販売されていた。アメリカ産の衣料品を除き、コットン製品は主にイギリス産で、主な品物には上衣、木綿生地、更紗織りや、長い布地があった。この市場のためのこれらの商品、特に更紗織りを選ぶ際には、大きな派手な花と葉の柄のものや緑地が好まれていた。また未漂白の長い布が最も好まれた。亞麻布にはあまり需要が無かった。廣州で使われる絲は英国とインドからもたらされた。22番から45番までの規格のものが最も売れ行きが良かった。ここに述べられた綿製品の販売は年々増加していった。中国人は、彼ら自身のために徐々にこれらを採用したのは、その優越性を暗黙のうちに認めていたとされる。

イギリス東印度会社の貿易船や地方貿易船によってインドのBombayやBengal地方から棉花が輸入されていたことがわかる。その後は、イギリス本国からも綿製品が輸入され、漸次廣州貿易によって、中国国内に浸透していったとされる。

19世紀中葉の中国の貿易案内を記したWells Williams, “*A Chinese Commercial Guide*”には、中国が輸入した商品の中に、Cottonが次のように見られる。

Cotton, or mien hwa 棉花; the chief varieties are Bombay, 軟花 yuen hwa or soft bales; Bengal 硬花 kang hwa, or hard bales; Madras, 方包 fang pan, or square bales; Palembang, 舊江 kiu kiang. The average annual import into Canton for the last fourteen years has been 244,629 bales, of which 171,000 bales were Bombay, 35,677 bales Bengal, and 37,752 bales Madras; in the years 1847 and '48, there were about 5,500 bales of native growth brought

54) ‘Articles of Import and Export, Imports and Exports of Canton,’ *The Chinese Repository*, Vol. II, from May, 1833, to April 1834, second edition, Canton, 1834, pp.458-459 (pp.447-472).

from Shanghai, but since then this sort has nearly ceased to come. In 1851 a failure in the native crops caused very high prices to rule in the Canton market, and produced an import from India in 1852 of 409,213 bales; that of following year, however, being smaller than since 1841, viz., 147,182 bales, showed that under ordinary circumstances consumption could not take off more than about the average of the fourteen years, which may be computed at 241,548 bales.⁵⁵⁾

綿、または *mien hwa* 棉花のことで、主な品種は、ボンベイから、軟花 *yuen hwa* または軟梱が、ベンガルの硬花 *kang hwa* あるいは硬梱が、マドラスから方包 *fang pau*、または四角梱が、バレンバンから舊江 *kiu kiang* などがあった。過去14年間と言うから1840年代ころの廣州への輸入量の年平均は244,629梱であり、うち171,000梱はボンベイ、35,677梱はベンガル、37,752梱はマドラスであった。すなわちボンベイ産が約70%、ベンガル産が14.6%、マドラス産が15.4%を占めていたことがわかる。1847年と48年には、上海からもたらされた約5,500梱があったが、これは江南の棉花であろう。しかしその後にはこの種のものほとんど見られなくなった。1851年には、棉花栽培が不作であったためか広州市場では価格が非常に高騰し、1852年にはインドから409,213梱の輸入が行われた。しかし翌年は1841年以来、147,182梱よりも少なくなっていた。一般的には廣州市場の消費は241,548梱と14年間の平均値を越えることは困難であったようである。

Cottonの輸入に対して、“*A Chinese Commercial Guide*”では、ナンキン木綿について次のように記している。

Nankeens, 紫花布 *tsz’ hwa pu* or 赤布 *chih pu*. This cotton cloth is named by foreigners from Nanking, where the manufacture is said to have began. It is woven from the reddish cotton grown in Kiingnan; the looms of Kiangsu produce the best. There are many varieties and qualities, not easy to describe; those manufactured in Canton and Fuhkien are of an inferior quality; but the Chinese article still maintain is superiority in color and texture over the imitations of other countries.⁵⁶⁾

55) Wells Williams, “*A Chinese Commercial Guide, consisting at a collection of details an*”, Fourth Edition, Canton, The office of the Chinese Repository, 1856, p.148.

56) *Ibid.*, p.180.

ナンキンすなわち南京木綿布は、紫花布 *tsz' hwa pu* または赤布 *chih pu* と呼ばれ、この綿布は南京産であるとして外国人が呼称したと言われていた。江南で栽培された赤い綿から織られていて、江蘇省の織布が最高であるとされ、説明するのが困難なほど多くの品種と品質があった。廣東と福建で製造されたものの品質は劣悪とされたが、中国の綿布は他の国の模倣品以上の色や質感の優位性があったとして知られていたのである。

4 小結

中国の衣料の歴史において絹や麻などに比較して、きわめて遅く中国の衣料の原料として利用されるようになった棉花であるが、明代には中国国内で広く知られるようになり、清代となると高品質な衣料として加工され、廣州貿易を通じてヨーロッパへも輸出されるようになった。輸出品は Nankeens 南京木綿として高品質の棉花布を生産した江南のものからナンキンとして俗称された。

ところが、18世紀前葉に廣州貿易を通じてインド等から棉花が輸入されてきた。この問題を指摘した廣州貿易に詳しく李侍堯が、雲貴総督となり、緬甸が棉花多産の地であることを知り、イギリス東印度会社の地方貿易船によって中国にもたらされと考へ、輸入禁止を提議し、乾隆四十三年（1778）の上諭によって棉花の輸入禁止になる。廣州においてイギリス東印度会社の地方貿易船による棉花の輸入を知っていた李侍堯が、雲貴総督となって、清国と緬甸との国境紛争により緬甸が棉花の大量生産国であることを知ったことで、棉花の輸入を禁止するように乾隆帝に提議したが、しかし、廣州に輸入される棉花の多くがインド産のものであったかについては十分に認知していたかどうかは不明である。

乾隆四十三年（1778）の棉花の輸入禁令にもかかわらず、棉花の輸入は減少せず、逆に漸次増加していったのであった。その背景としては、Wells Williams が指摘したように、廣東市場において中国の人々から一定の需要が存在していたためと考えられる。